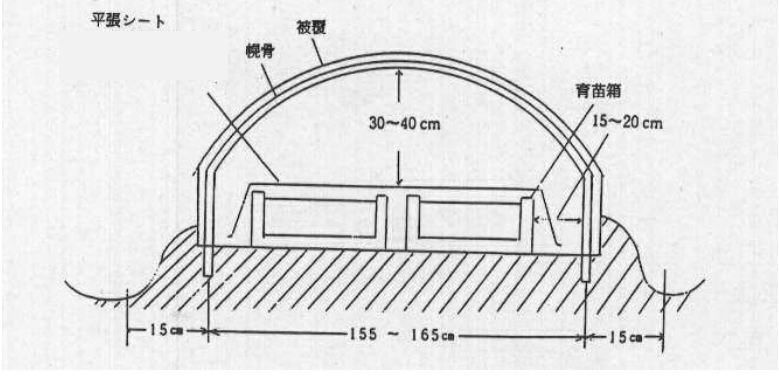


1 作物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 麦の管理</p>	<p>(今月の作業管理のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○麦の管理 ○早期水稲の育苗 <p>ア 穂肥</p> <p>農林水産研究所（松山市）における11月中旬は種の平年の出穂期は、はだか麦ハルヒメボシで3月18日、小麦チクゴイズミで3月24日である。今年は1月から2月にかけて気温が高く推移し、麦類の生育が進んでおり、平年より早く出穂すると予測される。さらに1か月予報（2月15日高松地方気象台発表）では、平均気温は平年より高い見込みであり、はだか麦、小麦ともに出穂期が早まる可能性があるため、今後の気象動向もこまめに確認する。</p> <p>穂肥の施用時期は「出穂前30～25日」であり、幼穂を観察し、幼穂長5～10mmを目安に施用する。</p> <p>穂肥の施用量は、ハルヒメボシ、チクゴイズミともに10a当たり成分量で窒素3kgを基準とするが、中間追肥量や生育状況及び葉色により加減する。</p> <p>なお、穂肥の増量は穂数を増加させるが、茎数の少ない条件下では、遅れ穂を誘発し、成熟の遅れや品質低下を招くため、施用量は基準量を超えないようにする。</p> <p>イ 湿害対策</p> <p>3月は菜種梅雨と言われるほど雨が多い時期である。1か月予報では、今後の降水量は平年より多い見込みであり、排水対策が不十分なほ場では湿害が懸念される。この時期の湿害は、根の機能障害をもたらし、収量や品質を大幅に低下させるため、徹底した排水対策が必要である。降雨後の水がほ場外へ排水できるように、排水溝（明渠）の補修を行っておく。</p> <p>ウ 赤かび病防除</p> <p>赤かび病は多発すると収量・品質が低下するだけでなく、赤かび病菌が産生するかび毒は人畜に有害で、農産物検査では赤かび粒は混入してはならないとされており、麦栽培において極めて重要な病害である。</p> <p>赤かび病の防除は、出穂時期が平年並であれば4月以降となるが、出穂・開花期が早まり気温15℃以上で連続した降雨があると3月下旬頃から防除が必要な場合があるので、麦の開花状況や天気予報、病害虫防除所の子のう胞子飛散情報をこまめに確認する。</p>

項 目	作 業 内 容
(2) 早期水稻の育苗	<p>早期の水稻では今月より育苗を開始する。この時期は、まだ寒い日が続くことから、苗立枯病やムレ苗が発生しやすいので、次の点に注意する。</p> <p>ア 用土の準備 育苗用土は通気性や透水性が良く、かつ保水性や保肥力が必要である。市販の人工粒状培土などを用いる場合は、品質が保証されたものを用いる。山土や水田土壌を用いる場合は、土壌のpHを4.5～5.0に調整する。肥料は、苗箱当たり分量で窒素およびカリは1gとし、リン酸は過剰症が出る場合があるので0.8gとする。</p> <p>イ 浸種、催芽 種子は塩水選と種子消毒を徹底する。水稻の種子は1日の平均水温の積算が100℃になると発芽するので、それを目安に10～20℃の水温で浸種を行う。コシヒカリなど発芽しにくい品種はやや長めに浸種する。 出芽揃いを良くするため、浸種後の催芽を行う。約30℃で高湿度の室内で約1日間芽が出るのを促し、ハト胸状態にする。</p> <p>ウ 播種 早期栽培では、普通期栽培より育苗期間が長いため、播種量は催芽粃で箱当たり160g以下の薄播きとする。 出芽は出芽室や育苗器内の暗黒下で、28～30℃で2～3日保温する。これ以上の高温になると立枯性病害が発生しやすいため、出芽室内の温度を上げ過ぎないように管理する。</p> <p>エ 緑化・硬化 芽が5mm程度伸びたら緑化に移る。芽を伸ばしすぎると2段根になるので注意する。なお、緑化移行時に強い光や5℃以下の低温にさらすと葉緑素の形成が阻害され、白化現象が発生するので、育苗シート等で遮光と保温に努める。 緑化は、シルバーポリシートのトンネル育苗（次頁図）が簡易である。昼間は20～30℃に保温・換気し、夜間は10℃以上に保温する。4～5cm程度に伸びたら被覆をはずし硬化に移る。苗の根張りを良くするため、床土が過湿にならないよう注意する。また、低温時期の育苗では、地温低下防止のため午前中にかん水する。</p>

項 目	作 業 内 容
	 <p data-bbox="550 660 1332 705">図 シルバーポリシートによるトンネル被覆の育苗図</p>

(作成 農林水産研究所)